

ナースステーションで医師と連携をとる黒澤さん。コミュニケーション力がモノを言う。

東日本大震災から8年  
支援を必要とする地域はまだある  
その一つ、南相馬の今に医療者は  
目を背けてはならないと思う

伊藤準也  
が行く  
Vol.50

笑顔が絶えない病院に変わった小野田病院。これこそ「黒澤マジック」だ。

ITO SHUNYA  
GA IKU  
伊藤準也  
が行く  
Vol.50

Hospitality Support  
和心

## 南相馬では、 看護の力が活きる。

今回、伊藤準也は東日本大震災の爪痕がまだまだ残る福島県南相馬市へ。小野田病院で災害支援ナースとして活動を行う黒澤和子さんと、災害支援ナースを受け入れた同院の但野圭子看護部長に、その取り組みについて話を伺いました。



### 地震・原発事故の南相馬市 医療機関では人材不足が深刻

**伊藤** 東日本大震災から8年ですが、南相馬というと、どうしても福島第一原発の放射線汚染事故の視点で語られてしまいがちですが、地震や津波の被害もかなりあったのではないですか？

**黒澤** 聞いたところでは、南相馬市だけで1000人以上が亡くなりました。いまだに仮設住宅や借り上げ住宅で生活されておられる方もいます。

**伊藤** 黒澤さんは災害支援ナースとして月に1回、小野田病院に来ていらっしやるんですよね。

**伊藤** はい。今年で5年目になります。災害時、小野田病院はどんな状況だったのでしょうか。

**但野** 建物の崩壊は何かまぬがれま

したが、原発事故の影響で1000人以上入院患者さんは避難しました。病院は一時休業という形をとった後、患者さんから授業の希望が多く寄せられるようになったため、比較的早い時期に再開しました。古くからいる医師や看護師などは震災後も病院を離れることなく、今も働いてくれています。

**伊藤** それは何よりでしたね。

**但野** ただ、原発事故の影響は思った以上に大きいです。震災以降、病院の将来を担う20代、30代の若い看護師の人数がほとんどありません。今病院を支えてくれている60代前後の看護師が定年を迎えると、人材が足りず非常に厳しい状態になります。実際、震災後5年間続けていた訪問看護も、現在は中断せざるをえない状況です。

**伊藤** 黒澤さんが小野田病院を知る

きっかけとなったのが、医療関係者を南相馬に招待するバスツアー（福島県病院見学バスツアー）だと聞いています。

**黒澤** はい。首都圏に住む看護師を対象に福島県内の医療機関を視察してもらい、就職につなげることを目的にしたツアーで、2015年2月13日から計4回開催されました。

**伊藤** なぜこのツアーに参加をう

**黒澤** 実は、震災から1カ月後、日本看護協会から災害支援ナースとして派遣されたのが福島で、3泊4日で避難所をいくつか回り、被災者の支援をさせていただきました。福島は私の出身地（栃木県）の隣という地理的な親近感もあって、活動を終えたあととも何か継続的な支援ができないかと、ずっと考えていました。そんなときにこのツアーを知り参加しました。

### 就職ツアーで小野田病院へ 縁を感じて「支援」を申し出

**伊藤** 震災から4年経っての活動ですが、ようやく支援への希望が叶ったという感じでしょうか。

**黒澤** そうですね。私の周りにも支援したいという人が多いのですが、皆さん「どうやって関わればいいのか分からない」と言います。幸いなことに、私はツアーをきっかけにこうしてつながりがあったので、これをさらに広げていき

いと思っています。

**伊藤** ツアーでは福島県の医療機関をいくつか訪ねていますよね。小野田病院での支援を決めた理由は何か？

**黒澤** 一つは、またこの支援も入っていないかったということ。もう一つは、病院に「縁」を感じたからです。何より、菊地安徳院長が「ぜひこちらに来て力を貸してください、助けてください」とおっしゃったときの、あの疲れ切った表情は今でも忘れられません。ツアーの途中だったものの、小野田病院で支援したいの思いが強まって、但野看護部長に「この病院の支援を私にさせてください」と直訴しました。

**伊藤** 突然のことですが、但野さんも驚かれたでしょう。

#### PROFILE

Hospitality Support 和心のこころ代表  
黒澤和子さん



聖協医科大学看護学部卒。大学病院の手術室看護師などを経て、JFPC・アフガン難民救済事業でパキスタンへ派遣される。2009年、災害支援ナースに登録。2011年 Hospitality Support和心を設立。

2015年6月から福島県南相馬の小野田病院で支援活動を開始。阪神淡路大震災では北淡診療所でボランティア活動を行い、東日本大震災・熊本地震では災害支援ナースとして日本看護協会から福島県・熊本県に派遣されるなど、幅広い看護支援活動を行う。

# 押しかけ女房的に小野田病院に来て 支援を続ける黒澤さん こういふ看護師が看護の未来を 導いてくれそうな気がする

**伊藤** それはもう。受け入れの気持ち  
が固まっていなかったら、「決めまし  
た」ですから。結局、押し切られた  
形にはなりませんが、あのときの黒澤  
さんには、ものすごいエネルギーを感じ  
ました。あのエネルギーこそ私たちには  
必要だったのだと、今になって思います。  
**伊藤** 黒澤さんは、小野田病院の支援  
を通じて、周りに誇りたい、伝えたいこ  
とがあったんですね。

**黒澤** はい。一番は、福島の状態です。  
地震の被害に加え、原発事故があった南  
相馬の医療機関での人材不足は深刻でし  
た。イメージが先行して福島には入り  
にくいとか、怖いとか、そう感じている看  
護師が少なくありません。ですが、小野  
田病院のスタッフのように日々、活動し  
ている医療者もいます。こうした地域や  
医療機関に支援が入るためには、もっと  
多くの正しい情報を発信していかなけれ  
ばいけないと思っています。

## 前を向けないスタッフに笑顔 黒澤マジックで変わる

**伊藤** ここではどのような支援から始  
めたのですか？

**黒澤** 当時はオールマイティな看護師  
を目指していました。

**伊藤** 阪神淡路大震災ではボランティア  
A活動をされています。

**黒澤** 看護師の仕事って本当に素晴ら  
しい職業だと思っんです。とくに災害  
看護とは看護の原点。人に寄り、マニエ  
アルなんてあってないようなもの。今、  
できることを考え、経験を活かして実  
践行動に移す。とくに南相馬のような  
地域では看護の力が活きてきます。

## 地域の活性化をみんなて考える 南相馬で「MND C」が発足

**伊藤** 支援活動では、希望する看護師  
さんや看護学生さんなどを同行させて  
小野田病院での採用の道筋をつけるとい  
う活動も並行されています。

**黒澤** これまで38回支援活動を行い、  
のべ90人に参加してもらいました。都  
内からの参加者が多いですが、静岡県  
や熊本県などからも参加されています。



患者の身の回りの  
清潔ケアが黒澤さ  
んの仕事。

伊藤隼也  
が行く  
50

**黒澤** 小野田病院からの希  
望もあり、入浴介助などを  
含め、患者さんの身の回り  
の清潔ケアから始めました。  
やはり毎日病院にいるわけ  
ではないので、医療業務を行うことは難  
しいです。そこで一緒に活動してくださ  
る支援メンバーと、忙しくてケアまで手  
が回らない看護師の手足になろうと思っ  
ました。

**伊藤** 周りの反応はどうでしたか。「こ  
の人、誰？」みたいな感じ？

**黒澤** そう、そうです。

**伊藤** 忙しいとはいえ、手が回らない  
ケアを外部の看護師が手伝っている。や  
りたくてもできないジレンマを抱えてい  
る現場の看護師さんからしたら、あま  
りいい気持ちではないですよ。

**黒澤** そうだと思えます。特に最初は  
でも、同じ看護師として、患者さんが  
喜ぶ姿を見るのは嬉しいじゃないですか。  
そういうところから少しずつ認められ  
るようになりました。

**伊藤** 小野田病院は、黒澤さんが来た  
ことで変わりましたか？

**黒澤** とても。一番は笑顔が増えたとい  
うことでしょうか。今ではスタッフ一同  
黒澤さんが来るのが楽しみで仕方ない  
という感じですよ。

**伊藤** 笑顔ですか。少なくとも5年前  
は笑顔があまりなかったということでは  
笑顔があまりなかったということでは

ね。黒澤さんは最初に小野田病院を訪  
ねたとき、どう感じましたか？

**黒澤** ポジティブ・シンキングなので基  
本的に悪いところは見えないんですが、「  
「疲れているな」とは感じました。とは  
いえ、今の医療機関はどこも疲れていま  
すから、小野田病院が特別という感じ  
ではなかったです。」

**伊藤** 但野さん、いかがですか？

**但野** 疲弊はしていました。確かに災  
災直後には病院が復活でき、診療を再  
開しましたが、なぜか今まで普通にで  
きていた簡単なケアができない。具体的  
にいうと、患者さんに流暢をすることに  
なったけれど、「あれ、これってどう  
やって使ったっけ？」という感じでした  
しかも、そうした状況が一人だけではあ  
りませんでした。

**伊藤** 震災のショックでしょうか。

**但野** それもあると思いますが、本当  
のところは分かりません。ただ、そうい  
うなかで業務だけが増えていき、誰も  
が前を向けなくなっていたのは事実です。  
そんなときに黒澤さんが支援に入ってく  
れたことで場が明るくなり、前を向け  
るようになった。まさに「黒澤マジック」  
です。

## 支援に携わりたくて看護師に 災害看護は看護の原点

**伊藤** 黒澤さんはどう思われますか？

側で宿舎を準備してくださり、ガソリ  
ン代として交通費を頂戴することにな  
りました。他のメンバーが同行するよう  
になってからは、東京から南相馬までの  
交通費を受け取り、一台で乗り合わせ  
て来ています。

**伊藤** そうでしたか。

**黒澤** ただ、私自身はそれでいいと思っ  
ているのですが、今年からいわき明星看  
護大学の学生のほか、4つの大学からの  
支援希望の申し出がありました。継続  
するためにも、有償ボランティアとして  
活動するための仕組みを作らなければ  
いけません。今後の課題とします。

**伊藤** そこは政治の力が必要ですね。  
看護連盟にもサポートしてほしいとこ  
ろです。

**黒澤** 南相馬で継続して支援を続けて  
いるとわかりますが、いろいろな困難が  
あるなかで、それを乗り越えて病院や地  
域を守り、みんながこうして医療活動  
を続けている。お節介な方もしれませ  
んが、この人たちは折れてはしくな  
い。支援は今後も継続していきたいです。  
**伊藤** 一人の看護師の強い思いが、現場  
を変えていったわけですね。改めて看護  
の奥深さを感じました。また、地域の  
病院同士が生き残りをかけて、本音で  
協力し合う。まさに本来の地域医療の  
あり方なのだと思います。ただ、お二人  
もおわかりのように現実には厳しい。この

**黒澤** 答えになっっているか分かりませ  
んが、災害現場の支援ではコミュニケーション  
がとて重要ですよ。一人ひとりに  
明るく声をかけて、挨拶をして、「大丈  
夫？」とか、「少しやせたね」とか、そ  
ういふ会話のなかで大切なことも伝え  
ていきます。同じように小野田病院で  
も、お互いが声を掛け合うことで職場  
がよい方向に変わっていくことを伝えて  
いきました。

**伊藤** 大事なことです。

**黒澤** 必要なことや学生・他職種の受  
け入れ依頼なども遠慮せずに、院長や  
看護部長に相談するようにしました。  
**伊藤** 黒澤さんがそもそも災害支援  
ナースを目指したのは、どのような理由  
からですか？

**黒澤** 私の場合、看護師になってから  
災害看護に興味を持ったというより、  
もともと看護で奉仕の活動がたくたく  
看護師になりました。看護師になって  
最初の4年間は大学病院で看護のスキ  
ルを身につけ、グローバルに活動した  
かったこともあり、5年目に海外での支  
援活動に携わりました。

**伊藤** それがあフガン難民救済事業の  
パキスタン派遣ですね。大学病院ではど  
こに所属していたのですか？

**黒澤** 手術室です。

**伊藤** 手術室看護師なら、外科のスキ  
ルは身につけられますね。

先、この取り組みがどう進んでいくか、  
注視していきたいと思っています。今日はあ  
りがどうございました。

## 災害支援ナースとは

都道府県看護協会に登録し、看護職団  
体の一員として被災地に派遣される看護  
職。被災地への派遣は日本看護協会災害  
時支援ネットワークにより、日本看護協会  
が都道府県看護協会と派遣調整の上で行  
う。日本看護協会災害支援ナースは約  
9500人、東京都看護協会災害支援ナ  
ースは約700人(2018年3月末現在)。

## PROFILE 伊藤隼也 (いとうしゅんや)

医療ジャーナリスト・  
写真家  
医療情報研究所代表

患者中心の医療を実現す  
るため医療ジャーナリスト  
としてテレビや雑誌などの  
メディアで活動中  
ホームページ shunya-ito.tv



関東安楽院院長と一緒にパトリー。